

子供時代と自伝についての試論

——『フランケンシュタイン』の与える不安——

山 本 妙

1

メアリー・シェリーの小説『フランケンシュタイン』(*Frankenstein: or The Modern Prometheus*)は、1818年に出版され、改訂を経て1831年に第三版が出版された。この時期は、18世紀後半から引き続いて、英国において子供と教育が人々の関心を集め、子供観が大きく変化した時期であった。また、ルソーの自伝を皮切りにして、子供時代に重点を置く自伝が書かれるようになった時期でもあった。そんな中で、自身の子供時代と生育歴に並々ならぬ関心を寄せているように見える三人の男性の自伝から成る小説をメアリーが書いたということは、注目に値する。『フランケンシュタイン』をメアリー・シェリーによる“Romantic idealism”の研究ないし内部批判として読む研究がある。¹ 同時にこの小説は、“Romantic autobiography”，すなわち、この時期に書かれ得たであろう自伝についての研究である。

『フランケンシュタイン』の中で、若い科学者によって作り出された名のない怪物は、アルプスの山中で、自分の造り主に向かって次のように自分の苦衷を訴える。

But where were my friends and relations? No father had watched my infant days, no mother had blessed me with smiles and caresses; or if they had, all my past life was now a blot, a blind vacancy in which I distinguished nothing. From my earliest remembrance I had been as I then was in height

and proportion. I had never yet seen a being resembling me, or who claimed any intercourse with me. What was I? The question again recurred, to be answered only with groans. (121)²

What was I? という問いは古来から問われ続けてきた問いである。しかし、この怪物の発言を裏で支えている人間についての観念は、かなり新しいものである。怪物はこうした人間観や人間関係についての観念を、ド・レシー家の人々を盗み見、会話を聞くことによって身につけた。そのド・レシー一家とは、ローレンス・ストーン (Lawrence Stone) の定義に従えば、17・8世紀に台頭してきた近代ブルジョア核家族の、隔絶された環境における極端に理想化された姿に他ならない。³ 試みに、自分に他人がもつような家族や友人に取り囲まれた子供時代の記憶がないということに身悶えし、自己の存在そのものを揺るがされるような不安を感じる怪物と、自伝『告白』の中で、覚えていない時期などいまの自分となんの関係があるのかと言いつつアウグスティヌスとを比べてみれば、両者の間には長い年月の隔たりがあると感じざるを得ない。⁴ われわれは、子供とは何か、主体の形成にとって子供時代はどのような意味をもつか、というような、一見人間性に深く根ざしていて古今を通じて変わらないとみえることでさえ、歴史と共に変わる、その時代と社会の産物なのだということに気付かされる。

メアリー・シェリーは、人間が人間を造るという、このプロメテウスの情熱とその帰結を描く物語を、われわれにも親しい近代核家族という背景の中においた。また、語り手の回想を通して、子供時代が各々の人格形成においてどれだけ重要かを強調したという点でも、この小説は特徴的であった。その結果この小説は、人間形成において家族、特に親子の関係がいかに大切なか、自己のアイデンティティにとって子供時代がいかに重要であるかといったテーマを表す一種の家族小説としても読めるものになった。現代の批評家も、このテーマに関しては、フランケンシュタインの悲劇は彼の “Promethean excess” よりも彼の「子供」である怪物を愛せなかったという “moral error”

に端を発しているとか、⁵『フランケンシュタイン』は平等で健全な家族関係と愛情深い親が得られなかったなら社会的、心理的にどのような破局をもたらすかを探ったものだ⁶、といった道徳的な判断と読みを与えている。

この近代家族に基礎をおく子供観と人間観は、現代まで連綿と続いてきており、われわれにとって自明のことになっている。その証拠に、上に引用した怪物の不安の叫びは、その後さまざまなSFや未来小説で変奏されて使われ、その自明のことがくつがえされたらどうなるか、という状況を示して「人間とは何か」を問うというパターンを生んでいる。たとえばP. K. デイックの小説『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』では、自分がアンドロイドか人間かわからずに悩むアンドロイドが登場するが、そこには“What was I?”という怪物の叫びのこだまを聞くことができる。⁷ また、ジョージ・オーウェルの『1984年』では、子が親を党に密告するという、「自然な親子関係」が分断された世界が描かれる。党による全体主義体制のもと、人々は過去の記憶を奪われ、語彙の統制のために批判的思考力も奪われ、人間らしい生活や感情も奪われて生きている。党によって蹂躪され、奪われた人間性の回復は、主人公が記憶の奥深くまで探って自分の子供時代と母親の記憶にたどり着くことで達成されるのである。ここでは、失われたものとしての「家族」と「自然な親子関係」や自然、人間の本来の性愛などが、主人公の取り戻した母の記憶に結びつき、一塊の価値群をなしている。

しかし、『1984年』を『フランケンシュタイン』の後裔とみなしたとして、改めて「元祖」『フランケンシュタイン』に目を転じると、そこには明らかな手触りの違いがある。『1984年』ではノスタルジックにさえ描かれる「家族」と「子供時代」とそれにまつわる価値群への信仰が、『フランケンシュタイン』ではむしろある種の居心地の悪さを伴って読者に伝えられてくるような感じを、われわれは受ける。確かに、家庭の幸福を脅かし人間関係の調和を破るような野心の危険性や、親と子の関係の尊さは、テキストの中で語られる。ところが、この小説のナラティヴは、そうした明白なモラルを語り

ながら、同時に自らが記述するモラルに逆らいたがっているような印象を時として与えるのである。これはおそらく、この小説のナラティヴが三人の男性の自伝的な語りによる三重の同心円構造から成っているということと重要な関係がある。三人の語り手はそれぞれに、自己を把握し、自分を人にわかってもらうために、「どんな子供時代をもったか」から語り起こして執拗に自己を語る。なかんずく外枠の二人の語り手、ウォルトンとフランケンシュタインの語りの中で、自己を形成する際に子供時代がいかに大切かということや、愛に満ちた家族の大切さは諄々と説かれている。ところが、彼らがそうしたモラルを声高に語れば語るほど、それらの概念や価値観が、当時の社会における人間観を支え、彼らの中に刷り込まれているコードにすぎないということが却ってあらわになってくる。その意味で彼らの語りは、当時書かれ得たであろう自伝のパロディとも読めるのである。また、本稿では詳しく取り上げないが、一番内側に位置する怪物の語りも、言語を習得すると同時に外枠の語り手達の価値観をも身につけ、彼らと同じ道筋をたどってしまうという点で、このコード化の現象を反復し、これを如実に戯画化している。彼らの自己を語ろうとする身ぶりの中に、私は、そうした自伝を生み出す精神構造そのものへの密やかな批判を読みとれるのではないかと考える。『フランケンシュタイン』が20世紀の読者に不安感を与えるとすればそれは、こうした自伝のパロディ化によって、われわれも共有している近代的な自伝の理念そのものに疑問が突きつけられているからではなからうか。またその自伝を生む精神構造に、われわれにとって自明と感じられる、「子供」や「自然」に関する考え方が骨がらみになっているからではなからうか。

以下は、自伝のパロディと言う観点から『フランケンシュタイン』を読む試みであるが、⁸ 次節では、どのような時代背景のもとでメアリーが自伝のパロディ化をおこなったのかを概観し、3節以下では、主にフランケンシュタインの語りをどう読むかを中心に追いながら、そこにこめられた、自伝を紡ぎ出す心性への密やかな批判を明らかにしたい。

2

英国における18世紀末から19世紀初めとは、福音主義運動の影響で勢力が強まった、子供を“Original Sin”に支配される存在とみなす考え方と、ルソーとロマン派の思想に代表される、子供を“Original Innocence”の状態にあるとみなす考え方が共存していた時代であった。⁹ ルソーは『エミール』において、子供をそれ自体で価値をもつ存在と捉え、子供は自然に近い存在であるので、本質的に善へとむかう本性と優れた感受性をもっており、それをゆがめずに育てなければならないと主張した。また『告白』においては、子供時代の自己と大人になってからの自我のあいだに本質的で重要な継続性を認める考え方を打ち出した。このようなルソーの考え方は、英国にわたり、修整され世俗化されながら教育家たちに影響を与え、さらにブレイクやワーズワースを初めとするロマン派の文学作品によって一般に膾炙していった。産業革命が進行し、社会の状況や精神面でのひずみが意識されるにつれ、こうした子供のイメージは理想化され、同時に自らのまわりに感傷性やノスタルジーをまといつかせていく。¹⁰ そして、こうしたロマン派的な子供観が地歩を固め、一方でヴィクトリア朝家族観が確立されていくにつれ、子供の見方の二つの潮流はまじりあっていった。中流家庭においては子供へのかわいがりと厳格な管理という二面の共存が見られ、大人を改心させる子供の純粋な心や、清い子供の早逝、社会悪の犠牲となる無垢で弱い子供、といったモチーフが、1840年を折り返す頃に、子供を扱った宗教冊子や小説で使われる型となっていく。¹¹ 同時に、この時期は、やはりルソーを重要な転機として、子供時代から思春期にかけての時期に力点をおいた自伝が書かれていく時期でもあった。¹² リチャード・コー (Richard N. Coe) によれば、子供時代と思春期を描く自伝が文学の形式としてほぼ確立したのは1835年頃だという。¹³

このような時代背景を考えると、ウィリアム・ゴドウィンとメアリ・ウルストンクラフトを両親にもち、ロマン派詩人の精華ともいべき人物達の

あいだで生きていたメアリー・シェリーの作品が、ルソーとロマン派の系列に属する子供観を表すだろうことは、ある意味で当然といえよう。『フランケンシュタイン』の執筆にあたってルソーの影響がどれほど大きかったかについては、デイヴィッド・マーシャル (David Marshall) が詳しく述べている。¹⁴ ルソーとロマン派の思想は、メアリーの生きていた環境の中に息づいていた。メアリーはそれを自覚し、そのことに自負も感じていたはずだ。少なくとも、同時期の女性作家によって数多く書かれた、伝道と矯正を目的とする読み物のもつ道徳臭はここには見当たらない。

しかしその一方で、メアリー・シェリーは、ルソーやロマン派の思想の影響を色濃く宿しながら、その忠実なスポークスマンというより、どこか屈折したかたちで彼らとその思想に対する反応を作品化しているようにみえる。メアリーは子供の感覚や子供の視点を再現しようとはしなかった（例外は怪物のスピーチであるが、これについては改めて述べる）。むしろ彼女は、子供時代に執着し、ここから語り起こして「自分」を物語ろうとするウォルトンやフランケンシュタインの語りを通して、ロマン派以降主流となるそうした自伝をパロディ化しつつ、そこに「出産」という出来事をはめこむのである。上で行った歴史的見取り図を少々乱暴に概括すれば、メアリーがこの小説を書き、改訂したのは、本来ラディカルであったルソーとロマン派の子供観が飼い慣らされて、ヴィクトリア朝家族観の中に流れ込んでいく過渡期であった。アン・メラール (Anne Mellor) のいう「ブルジョア核家族のイデオロギー」¹⁵ の浸透と、その家族観の要である、ロマンティズムの洗礼を受けた子供観と、「無垢な子供時代」を基点として自分を語っていかうとする自伝の衝動とは、どこかで関連しあいながら継起していった現象のように見える。われわれがメアリーによる自伝のパロディ化を追うということは、とりも直さず、ロマン派の巨星たちのもとで生きていたメアリーの、こうした事態に対する反応を見るということになるはずである。

3

自伝的語りは二つの欲求を根幹に持っている。自分がどのような人間であるかを把握したい、そのために、歴史、物語としての「私」像を構築したいという欲求と、それを人にわかってもらいたいという欲求である。単なる事実の羅列でなく（それは事実の認識と記述が言語を介して行われる以上、ありえないのだが）、一定の筋書きに基づいた物語としての「私」を持つのであれば人は人としての意識を持ち得ない。そして、どのようにその物語を構成するか、その「文法」とでもいうべきものは、その時代と社会で支配的な思潮によって与えられる。ここでウォルトンとフランケンシュタインが子供時代と家庭にこだわるのも、物語を成立させるためにはそこから語り起こすことが必要だという、暗黙の約束事が背景にあったからである。それでは、二人の語りからどのような精神的枠組みが見えてくるであろうか。

ウォルトンは姉への手紙の中で、自分の生い立ちを振り返り、どうしてこのような野心を持つようになったかを述懐する。また、自分がほとんど独学の人であり、教養や性格の落ち着きに欠けることを嘆き(19)、同時に、姉の優しい保護のもとで育ったことが自分の性格の基盤を作っており、船乗りたちの荒々しい行為には我慢できないと言う(20)。そして、自分を理解してくれて自分の欠点を矯正してくれる友人がほしいと訴えるのである。

フランケンシュタインはそんなウォルトンには、理想の友人として慕うべき人物に見えた。フランケンシュタインが自分を形づくったゆりかごとして描き出した家庭は、怪物がのぞき見てすっかりその価値観に染まってしまったド・レシー一家と同じく、近代ブルジョア核家族の特徴を全て備え、これを理想化して描き出したような家族である。¹⁶ フランケンシュタイン自身が“remarkably secluded and domestic”(45)という通り、外部には閉ざされ、夫婦、親子の情愛によって情緒的に深く結びついており、子供中心で親の子供に対する注目と関心が高い。その子供観と教育観についての記述は、1818年版に

比べると1831年版で相当書き込みがあるが、基本的な姿勢、すなわち子供は“the promise of virtues”をもって生まれてくるものであって、愛情を注いで育てることによって、それをゆがめずに伸ばすことが親の義務である、という点では一致している。¹⁷

望ましい人間形成のための条件はそれにとどまらない。ウォルトンの友人を求める言葉に答えて、フランケンシュタインは

... we are unfashioned creatures, but half made up, if one wiser, better, dearer than ourselves—such a friend ought to be—do not lend his aid to perfectionate our weak and faulty natures.(28)

と述べ、クラーバルが自分にとってそのような友人だったと語る。そしてまた、自分もクラーバルも、エリザベスという家庭の天使の感化をうけたおかげで、より円満な性格になったという (“I might have become sullen in my study, rough through the ardour of my nature, but that she was there to subdue me to a semblance of her own gentleness” (38))。また、ウォルトンによって証言され、フランケンシュタイン自身によっても語られるように、彼は自然の美に感動し、しばしば自然との交わりによって精神を高められる。

Even broken in spirit as he [Frankenstein] is, no one can feel more deeply than he does the beauties of nature. (29)

When happy, inanimate nature had the power of bestowing on me the most delightful sensations. (70)

ここに披瀝されているのは、いうなれば、産業革命が進行し、外に向けては帝国主義的拡張が進む中、一方で人々が“Man of Feeling”でもありたいと願った時代の、英国ブルジョア階級におけるおのが人格形成の理念である。愛情によって結ばれた理想的な家族の中で、もって生まれた資質を育まれる“Benevolent Man”。男性はやがて、人類の発展のために理想と野心を育むであろう。しかし同時に、彼は家庭内で、母や周囲の女性たちの感化を受け、“sympathy”や“sensibility”をも身につけるのが望ましい。家庭における愛情

深い生活、よき友人との交わりとそれによる感化、そして自然を愛でることから得る喜び。それらにより、ひとは望ましい性質を全て具現したより円満で完全な存在へと成長できるし、するべきだという思想が、フランケンシュタインとウォルトンの語りの底に流れている。フランケンシュタインは、これらの理念をしっかりと植え付けられた、彼の属する社会と階級の最上の部分を生きる存在であった。フランケンシュタインはまた、行き過ぎた自分の知的追求を省みて、ウォルトンに向かって、

A human being in perfection ought always to preserve a calm and peaceful mind, and never to allow passion or a transitory desire to disturb his tranquility. . . . if no man allowed any pursuit whatsoever to interfere with the tranquility of his domestic affections, Greece had not been enslaved; Caesar would have spared his country (55-6)

という訓戒を垂れさえる。彼の語りに表れているモラルとコードは、メアリー・シェリーも言い得たであろうものであり、これを読む限りにおいて、一編の誠実な自伝として間然するところがないものと言わざるを得ないのである。

この小説を読むときに批評家を手こずらせるのは、こうしたフランケンシュタインの語りと外枠のウォルトンの語りを提示するナラティヴのスタンスが一樣でなく、ナラティヴがどこまでフランケンシュタインの語りに対して批判的なかが特定しにくいということだろう。メアリー・シェリーは、フランケンシュタインの優柔不断や身勝手さをはっきりと示しているが、まるっきり価値のない男として描いたわけでもない。非凡な才能と野心をもち、それゆえ凡人には想像も及ばぬ苦悩も味わうことになったフランケンシュタインの美点は、ウォルトンの目を通してフランケンシュタインを描くことで裏打ちされる。また、父親をはじめ、日常性を越える出来事に思いもいたすことができない人々が誤ってジュスティーヌを裁くさまを「正義の名の下におこなわれる茶番」と見るフランケンシュタインには、小市民とは区別され

る芸術家的存在の卓越性といったものさえ感じられる。しかし、エリザベスが婚礼の夜に殺される場面などでの彼の欺瞞的な愚かさは隠れもない。また、怪物が、自分を追ってくるフランケンシュタインのために途上においた食料を、自分が祈願を捧げた聖霊の仕業と解して語るに至っては、彼の誤謬への批判は明らかである。それでいて、フランケンシュタインのせりふに、メアリー自身が内面化していたであろう価値観や家族観をふりわけ、語らせているのも事実なのである。

しばしば批評家は、フランケンシュタイン像に、ロマン派に対するメアリー・シェリーの内部告発や、そのプロメテウスの情熱のエゴイズムへの批判をよみとってきた。¹⁸ そしてその際には、家庭の幸福を破壊するような野心や、自然を客体化して収奪することなどにみられる「男性的価値観」に対抗するものとしての「女性的価値観」が謳われている箇所をメアリーの主張の現れとして、それに反する“male egotism”を批判する、という論法がとられることが多かった。その典型的な例であるメラーは、近代ブルジョア核家族の理想をあらゆる面に適用して、メラーの目から見て女性的価値を表すものをメアリーの主張する価値とし、それに反するものをフランケンシュタインにあてはめる。すなわち、メアリーはプロメテウスの革命思想を非難して家庭の平和を守る保守主義を擁護し、美学的には“sublime”より“beautiful”を好ましいとし、彼女にとって自然を対象化してこれを支配しようとするのは「悪い」科学で、“Mother Nature”という文句で表されるような自然の生産力を尊ぶのが「良い」科学だ、という具合である。¹⁹ 従って、上に引用した“A human being in perfection . . .”という発言こそメアリーの“credo”であり、これがフランケンシュタインの口から語られるのは、メラーに言わせれば一種のドラマティック・アイロニーだということになる。²⁰

メラーに従って、フランケンシュタインの口にするモラルの中で女性性の価値をあらわすものをメアリーに帰し、それを口にしながら自分のしていることがそれにもとるから、フランケンシュタインは悪い、という読みに徹す

れば筋は通る。しかし、メラーのいう「ブルジョア核家族のイデオロギー」が全くメアリーにとって疑問の余地のないものだったのか、また作品の中に提示されるさまざまな価値観や立場を、メラーの言うほどすっきりと男性性と女性性の二項対立に振り分けてしまうことができるかどうかは疑問である。例えば自然観でいえば、フランケンシュタインの遭遇する嵐の夜や北極の厳しい自然が、自然を侵そうとした者の受ける報いであって、クラーバルのように穏やかな自然を愛する者が自然の恵みを受けられるというのはいかにも恣意的な区別である。²¹ それならば、フランケンシュタインもそのような優しく穏やかな自然の風景に感動することはある。しかしそれとて、文明社会が自分に都合よく解釈する限りでの「自然」、自分にとって心地よい“aimable”な自然を愛でているだけだ、という見方もできる。²² メアリーは、おそらくは自分も共有していた“amiable”な自然観をフランケンシュタインに語らせながら、それに対するひそかな疑念を、その裏にしのばせているのかもしれない。

同様のことが“Man of Feeling”という要素についてもいえる。メラーによれば、フランケンシュタインは18世紀の“Man of Feeling”の“calculated inversion”であり、徹底して「男性的」に、自分の知的野心を満足させるために邁進する人物である。²³ しかし、フランケンシュタインの自伝全体を通して読むと、彼は徹頭徹尾そのような「男性的」要素が先鋭化して表れているような人物ではない。ウォルトンもフランケンシュタインも、他人の中に何よりも求めるのは“sympathy”であるし、悩めるフランケンシュタインはしばしば自分の“sensibility”を持て余す(97)。彼がクラーバルの中に認めて評価するのも“gentleness”や“affection”(70)である。ついでに言うなら、フランケンシュタインとは異なって穏やかな自然を愛し、“the ‘very poetry of nature’”(156)で造られていると評されたクラーバル自身が、インドへ渡って事業をしようという帝国主義的野心を持つ人物として描かれる(158)ように、そうした野心と“Man of Feeling”の要素は、この小説に描かれる男性の中に

常に同居している。先に述べたように、男子たるもの、野心を抱くと同時に女性的要素を取り入れて“Man of Feeling”たれ、という理念は、フランケンシュタインの語りの中にあらかじめコード化されているのである。だが、この点がメアリー・シェリーの批判を免れているかどうかは、やはり微妙である。これは、まさにアラン・リチャードソン (Alan Richardson) が“colonization of the feminine”と呼んだ現象の反映といっているからである。リチャードソンは、18世紀末から19世紀初めにかけて、“Age of Reason”から“Age of Feeling”へと精神的風潮が移行した際に、ロマン派の男性詩人や作家が、いったんは「女々しい」として女性に帰属させた“sympathy”や“sensibility”などの属性を自分の性格の一部として取りこもうとし、その願望を作品化したと述べている。²⁴ フランケンシュタインや他の男性の登場人物がこの現象をなぞって“Man of Feeling”であろうとすることは、メラーの批判の矛先をかかわすことにはなるかもしれない。しかし、そうした女性的価値をも自分のうちにとりこんで、自らを完璧にしていこうという精神構造は、それが文句のつけようがないものであるだけに、なおさら苛立たしさを感じさせるものでもあるのだ。²⁵

このように見てくると、フランケンシュタインの語りはさまざまな矛盾する要素を含んでいて、この中の都合のよいところだけつまみ食いして論理的整合性を求めようとしてもうまくいかない。われわれは、こうした矛盾する要素を含むものとしてフランケンシュタインの語りを受け止め、なおかつそれを提示するナラティブに、違和感や密やかな声にならぬ批判が感じとられるとすればそれはなぜか、を問うべきであって、この中の諸要素を男性的、女性的価値に分類して道徳的解釈を施そうと努めることにあまり意味があるとは思えない。フランケンシュタインの罪は、女性性の価値を口にしながらそれに反する自分の行動に気づかないということだけに帰せられるのではない。むしろ、彼の最大の「罪」は、彼の完璧なコードにのっとり、過ちをも含めて、「誠実な」一人の人間の来し方として自分の過去を語ってしまう、

ひとつの物語に仕立ててしまうという、その語りの性格自体にある。そして、そうした語りへの違和感や苛立ちは、フランケンシュタインの語りの中で、彼の語り口と語っていることの間にギャップがあるところ、あるいはあまりにも完璧に全てが彼のコードによって説明されてしまうところなどに、いわば透けて見えてくるのである。

4

フランケンシュタインは、まれにみる雄弁で自らの過去を語ることができるにもかかわらず、そのコードでは説明できない事態をその生涯の中に迎える。それは、怪物の誕生と、怪物と自分自身の性にまつわるできごとである。

自分の作った怪物の眼が開くのを見たとき、そのおぞましさにフランケンシュタインは逃げだし、自室の寝台に倒れ込み、夢を見た。

I thought I saw Elizabeth, in the bloom of health, walking in the streets of Ingolstadt. Delighted and surprised, I embraced her: but as I imprinted the first kiss on her lips, they became livid with the hue of death; her features appear to change, and I thought that I held the corpse of my dead mother in my arms; a shroud enveloped her form, and I saw the graveworms crawling in the folds of the flannel. (58)

誕生と生殖、そして死と肉体の腐食。これらが渾然と混ざりあった恐ろしいイメージである。ぞっとして目覚めたフランケンシュタインの前に、じっと彼を見つめる自分の作りだした「子供」の姿があった。手を伸ばし、何かものを言うかのように、音を出した怪物、再び恐怖と嫌悪にかられてその手から逃れようとする「親」フランケンシュタイン。このおぞましく悲しい物語の始まりであった。

ここには通常我々が見聞きするような、「親となった喜び」や「生命の誕生のすばらしさ」を謳うような言説はかけらも見当たらない。²⁶ しかし、フランケンシュタイン自身の中にそのようなコードがインプットされていなか

ったわけではない。1818年版でもそうだが、1831年版では特に、親子の愛情を要とした家族愛のすばらしさを自らの経験から何より尊いものと言う彼ではなかったか。フランケンシュタインがこの新しい生命を造ろうとしていた時、その行為は彼自身には、死と病に支配された暗い世界に光をもたらすものと思われた。彼は自分が生み出す新しい子孫から、世の中のどの父親もうけることのできないような感謝の念と愛情をうけることを夢想していたのである。しかし、現実にはフランケンシュタインの眼前に横たわっているのは、墓場や死体置き場からかき集めた死体の断片をつなぎ合わせてできた巨大で醜怪な肉塊であり、そこに生命が通って動き出したのであった。ウォルトンに自分の物語を語ってきかせる際にフランケンシュタインは、この人造人間作りの作業を「回顧して」、*“I dabbled among the unnhallowed damp of the grave”, “with profane fingers”, “filthy creation”* (54-5, italics mine) といった言葉を使って描写しているが、それは後から自分のコードにてらして付け足した説明である。ここでフランケンシュタインは、そのようなコードを突き破り、コードにのっとった描写を拒むような肉体と生命の誕生のシーンに立ち会われる。これを前にして、コード化された言動の権化であるような青年は、「醜く、おぞましかったから」という他には何の理由も説明もつけられずに、逃げ出してしまうのである。

この怪物誕生の「原場面」とその直後にフランケンシュタインの見た夢は、さまざまな伝記的、心理学的、フェミニスト的な立場から解釈することが可能である。しかし、それと同時にわれわれは、このイメージが生まれた背景には、現代のわれわれの社会よりもはるかに誕生と死が不可分に結びついて想起された社会があったことを思い出してもよからう。先に触れた通り、17, 8世紀には子供をかわいがる気持ちを強くもち、親と子の情緒的結びつきが強いという特色をもつ近代家族が成立していたという。メアリが『フランケンシュタイン』を最初に執筆したころにはそうした中流家庭を中心とした家族観、道徳観はほぼ確立していたということになる。しかし、例えば、

こうした子供をめぐる見方の変化の重要な要因とみなされている乳幼児の死亡率を見てみると、この時期、死亡率は18世紀から引き続いてまだまだ高く、ようやく1840年ごろからかなり減り始めてきたことがわかる。²⁷ 女性がひっきりなしに妊娠、出産し、新生児の死亡率も産婦の死亡率も高かった時代、出産の準備が死出の旅の準備につながるということが非常に多かったという時代²⁸は、過ぎ去って間がなかったのである。メアリーの母、ウルストンクラフトもお産のために生命を落とした。さらに言うなら、19世紀を折り返していながら、メアリー自身の妊娠・出産の体験は、そのしばらく後に定着する少産少死型のパターンよりも、ひっきりなしに妊娠して出産しては子供を失うという前世紀以前のパターンによほど近かった（この本を書き始めた1816年には、彼女はまだ一人の子しか失っていなかったのだが）。その一方で、家族礼賛、母性礼賛、子供礼賛の気運は、メアリーの属していたインテリ層、中産階級を中心に広がっていた。²⁹ とすれば、表向きには標榜し、内面化もしていたであろう子供観と家族観であっても、それが時代の趨勢となり、強力なイデオロギーとして発動し始めるのを目の当たりにした場合、そこにわだかまりや違和感を感じたとしても不思議ではない。自分の行動と感情についてすべてを語り、説明せねばすまぬフランケンシュタインが、自分のコードではこの出来事と自分のやったことを説明できなかったということは、フランケンシュタインの体現する一連のコードが、この生と死の交錯する、出産という事態をカバーできないということの寓意的表現とも見える。³⁰

フランケンシュタインの行動と、彼の語りの中の解説との間のギャップは、彼が一度は作りかけた女の怪物を破壊するところにも見られる。これは、彼が生んでしまった生命が当然要求する性と生殖への途を絶つ行為である。実は、生命を生むからには当然さけて通れぬ性と生殖自体がフランケンシュタインには直面し得ないものであり、エリザベスとの結婚もそれゆえ耐え難く恐ろしかったと思われるふしがある。³¹ それでいて、女怪物の破壊という行為自体は、後から見たとき、“I almost felt as if I had mangled the living flesh of

a human being”(170) とフランケンシュタイン自身が述懐するような凄惨で生々しい行為である。しかし、フランケンシュタインの語りにおいては、後の人類のために自分が禍根を残してはならぬという「人類への義務」として意識され、説明されるだけなのである。

こうしたギャップと私がよぶものが、フランケンシュタインの語りを通してわれわれの前にあらわになるのは、ナレーターを介さずに、フランケンシュタイン自身にすべて自分のやったことを語らせ、それを同情ある聞き手であるウォルトンの語りを通して提示するというやり方によって生まれた効果のひとつであるといつてよい。それは、性や死や出産という経験をわれわれは言語で切り取って認識するのであるが、同時にコード化された言語はそれらの経験を隠蔽し、われわれから遠ざけるものでもあるということを示している。しかし、フランケンシュタインの語りが自伝のパロディと読めるとすれば、そのパロディ化を誘う最大の要因は、彼が自分を語ろうとする限り、それをひとつの「物語」に仕立てずにはおられないということと、それを仕立てる「文法」がどこまでも自己完結的で自己肯定的な性格をもっているということであろう。

5

フランケンシュタインは、望みうる最上の家庭と環境のなかで育ち、優れた資質と人類のために何かをなそうという気高い理想をもった青年であった。しかし、人造人間を作ってその醜さに耐えきれずこれを捨てて逃げ出し、その怪物が自分の身近な人々を殺したことを知るに及んで、彼は後悔と自己嫌悪に苛まれる。

I had begun life with benevolent intentions, and thirsted for the moment when I should put them in practice, and make myself useful to my fellow-beings. Now all was blasted; instead of that serenity of conscience, which allowed me to look back upon the past with self-satisfaction, and from

thence to gather promise of new hopes, I was seized by remorse and the sense of guilt . . . (90)

この、「過去を満足感をもって振り返ることができない」ことが何よりもフランケンシュタインを苦しめる。この間のフランケンシュタインの語りは、なぜ真実を他人に打ち明けないかという言い訳と、ひとの“sympathy”を死ぬほど欲しながらそれを求められないと言う嘆きに終始する。要するにこの時の彼は、自分のやったことを彼のもつ文法とコードにてらして説明できないまま、自分についての「物語」を作れず、もがいているのである。けれども、エリザベスが殺され、父も死んで、失うものがなくなったとき、フランケンシュタインは逆に、自己像をしっかりと手に入れることができた。怪物を追って殺すこと。殺された愛する人々の復讐をすること。それは今、人類のために彼が天から与えられた使命となる(“You may give up your purpose, but mine is assigned to me by Heaven, and I dare not”(216))。後生の人々から“their pest”と呪われることを恐れさえしたフランケンシュタインは、自分を“martyrs of old”になぞらえ、“devotion”と“heroism”, “elevation of mind” (200)をもってその任務にあたることができるようになって、初めて安定する。たとえ追跡の旅が苦難に満ち、失った者たちを思って悲嘆にくれる毎日であっても、彼ははるかに楽になったはずだ。彼は自分に対して「物語」を語ることができるようになったのだから。

ウォルトンに向かってここまでのできごとを話し終え、最後に自分のこれまでの生涯を再び振り返る時、フランケンシュタインは“his own worth”と“the greatness of his fall” (210)を感じているようにウォルトンには見える。フランケンシュタインはようやく、自分のための物語を手に入れた——それは、輝かしく能力と希望に満ちた子供時代からの転落の物語であり、彼は自分を「墮天使」にたとえる (“From my infancy I was imbued with high hopes and a lofty ambition; but how am I sunk!” (211)/“like the archangel who aspired to omnipotence, I am chained in an eternal hell”(211))。壮大な比喩である。この一

編の物語、幸せて善良な子供時代の自分を起点にして、そこから現在の「私」まで、たとえ途中で脱線や陥没があったとしても、長く一筋に連続している物語こそ、彼が何より必要としたものであった。³²そして彼の場合、この自己実現の過程と自己把握のための物語は、どこまでも自己完結的であった。

フランケンシュタインの語りにコード化された人間形成の理念は、情愛に満ちた家族と、女性的な要素による影響や友人からの感化等を通して自らの欠点を克服し、より完全な人間になること、自然から学ぶことであると先に述べた。しかし、それらが、他者としての人間や自然との出会いというより、それらのもつ諸要素の“colonization”を通してより完全な人間へと近づくための、あるいはその成長過程を確認するための手段と化しかねない、自己中心的な要素をはらんでいたということにも触れた。³³ その精神構造は、フランケンシュタインが最後に自分の生涯を振り返るとき、もう一度あらわになる。自分の物語を語り終え、ウォルトンから自分を友としてもう一度生きる気力を取り戻してくれと言われたとき、フランケンシュタインは、死んだ友に替わる者はいないと言ってその願いを退けるのである。

Even where the affections are not strongly moved by any superior excellence, the companions of our childhood always possess a certain power over our minds, which hardly any later friend can obtain. They know our infantine dispositions, which, however they may be afterwards modified, are never eradicated; and they can judge of our actions with more certain conclusions as to the integrity of our motives. (211-2)

この発言はルソーの焼き直しのようにでいて、同時にフランケンシュタインの自伝を支える精神の自己完結的な性格をよく表している。彼は欠点の多い性格を完全にしてくれる友情の大切さを言うけれども、「地に堕ちた」と自らいう境遇にしながら、目の前の男の差し出す友情は不要だと考えている。実際には、あれほどの辛酸をなめ、不幸な事態をひきおこし、“How am I sunk!”と慨嘆しながらも彼は、一本の物語の筋につながれているという意味

で、同じひとりの人間なのだし、その物語を出発点から支えてきた彼のコードもなんらの大きな変化を蒙っていない。当たり前のことなのだが、この事実がメアリーを苛立たせる。彼の人格形成において本質的なこと、大切なことはみな子供時代に起こってしまったのであって、子供時代に培われた気質は「後に修整はされても、決して消し去れない」。フランケンシュタインが求めるのは、これまでの彼の行動を、彼の “infantine dispositions” をよく理解してくれる人によって、“integrity of our motives” に基づいて判断してもらうことである。その “infantine dispositions” とは、セオリーどおりにいけば、“pure” で “benevolent” なはずである。「子供時代」を起点にして、最後はそこに帰り、子供の時にもっていた “pure” な魂と “integrity of motives” にもとづいて、あるいはそれに免じて、過ちも含めて自分の全てを肯定するに至るという堂々めぐり。これが、フランケンシュタインの自伝を語らせる衝動なのだ。そのような彼であれば、最期の時を迎えて、“During these last days I have been occupied in examining my past conduct; nor do I find it blameable.”(217) と語ることができたのは当然であった。そしてそれは事実である。あの瞬間に怪物から逃げ出した、という事態を除けば、彼にも、誰にも、悪いところはない。この物語には、本当の意味での villain はいないのである。

これを読んだとき、われわれはルソーの自伝の冒頭の言を思い出さないだろうか。

I have bared my secret soul as Thou thyself hast seen it, Eternal Being! So let the numberless legion of my fellow men gather round me, and hear my confessions. Let them groan at my depravities, and blush for my misdeeds. But let each one of them reveal his heart at the foot of Thy throne with equal sincerity, and may any man who dares, say “I was a better man than he.”¹³⁴

ルソーと（或いは後のロマン派の自伝的詩人と）フランケンシュタインを同列に見ることはむろんできない。しかし、上のせりふを述べたときのフランケンシュタインもこれと同じ趣旨のことを言い得たはずである。そこに、メ

アリー・シェリーの、自分が描き出したキャラクターへの最大の批判と、こうした自伝を生む心性への密かな苛立ちとしか形容できない思いがある。なぜなら、「純な子供時代」を起点にして——つまり性善説で、個人をどこまでも価値あるものとして追求する立場にたち——、どんな過ちや欠点があっても、それを自分の山あり谷ありの物語に仕立て上げるタフな自伝作りのメカニズムは、同じ欲求をもち、同じ価値観の中にかからめとられていながら、その文法とコードが完全に自分のものではないということも意識せざるを得なかった、社会の周縁部に属する、“colonize”される側の女性の目からみて、はじめて明らかになるようなものだからである。このメカニズムは、「自然」であれ「女性」であれ、他者をとりこみ“colonize”していく、そうして自己の完成をめざしていく、人間形成の理念と同根である。そしてまた、どのような批判も敵対する要素も、自らのうちにとりこんで肥え太っていく性質をもつ、イデオロギー的なものと相似している。そしてこのメカニズムが、いわば斜に構えたアングルから露にされることが、われわれを不安にさせる。なぜなら、こうした人間観と子供観、自伝の理念は、大筋において、ロマン派の時代以降ずっとわれわれも共有しているものであり、われわれにとって「自然」で自明のものと思われていた子供観や人間観が、ある時代と社会で支配的なイデオロギーの産物なのだと意識させられることほど、われわれを不安にさせるものはないからである。

メアリー・シェリーは、怪物を除けば、一度だけ「子供」らしい子供を作品の中で描いた。フランケンシュタイン家の末っ子ウィリアムが怪物と出会う場面である。怪物はヴィクターにとっては子供だが、すでに言語をマスターし、「大人」の分別と思考様式を備えていて、ウィリアムを見て、子供はまだ醜さに対する偏見がないから、この子をとらえて教育したら自分の慰め手になってくれるだろう、と考える。ロックの *tabula rasa* の考え方の反映ともとれるし、幼児を大人の社会の有害な影響から遠ざけて理想の教育をしようということなど、まさに『エミール』を思い起こさせる。しかし、この

「大人」の思惑をメアリーの描く「子供」ウィリアムはみごとに裏切る。この幼い子供は醜いもの、異形のものへの恐れも偏見もたっぴりもちあわせているし、それどころか、自分の親の社会的地位を頼みにして怖い奴をへこませようという知恵さえ働かせる。ここにも「あらまほしき」「子供」の概念がコードにすぎなかったというパターンがみられる。このエピソードに、子供の「無垢な心」が外見の“deformity”にもかかわらず（おそらくは内面の無垢を見抜いて）怪物を受け入れるという、われわれが期待するようなパターンが与えられるのは、1931年のジェームズ・ホエール監督による映画「フランケンシュタイン」においてである。そこで我々は、無垢な少女マリアと、おそらく知能の発達が不完全であるゆえに「無垢な子供と同じような」状態にある怪物の出会いを見る。そして、無邪気であるゆえに怪物が少女を殺してしまうだろうことを予期し、その期待通りになることを知る。³⁵ ここで我々は、無垢な者の死という、Little Nell 以来ずっと我々の中に残っているらしい願望の成就されるのを見るのである。同時にこの二つの対比は、小説『フランケンシュタイン』より後、ロマン主義の時代を経た後に、われわれがますます子供に対して理想的なイメージをもつようになったことを示している。³⁶ そしてまた、この対比は、われわれのうけいれている子供観や自然観には、北本正章氏の表現を借りればかなり「近代ロマン主義の銀粉」³⁷ がふりかけられているらしいことも意識させる。小説『フランケンシュタイン』の作者は、まだ銀粉をそれほどふりかけられていないか、ふりかけられることを拒否している。だから小説『フランケンシュタイン』は、フランケンシュタイン神話に後世の我々が施した粉飾の戯画であるかのように、読者の前に立ち現れるのである。

『フランケンシュタイン』は、19世紀初め、ポストロマン派的な子供観と自叙伝の型が定着する前夜に生み出されたひとつの変種と考えると、「子供時代」と「自伝」をめぐる文学史の中に位置づけ、その特異性をよく説明で

きるのではなかろうか。おそらく、メアリー・シェリーにとっても、フランケンシュタインの語りを始めとして作中で披露される家族観、子供観、そして人間成長に関するモラルは、自身が内面化していたものであったろう。しかしそこに、自分自身の体験や感覚と相容れないものを感じずにはいられなかったのではなかろうか、というのが、私がこの小論でたてた仮説である。それは、その精神の偉大さを賞賛しつつも、自分の感覚とは違うところで「子供時代」を賛美し、過ちを含めてその成長と遍歴の過程をつづり、最後には自己を肯定するというかたちで自己を語ることのできる、ルソーはじめロマン派の文学的自伝を「書き得る」作家に対して覚える違和感でもあった。その違和感が、この時代に書かれ得た「自伝」のパロディともいえるウォルトンとフランケンシュタインの自伝的語りを書かせたのであり、そこに密かな批判や、自らも内面化しているコードへのアンビヴァレントな気持ちをすべりこませさせたのではなかろうか。その結果、小説『フランケンシュタイン』は、おそらく作者自身も予期していなかったかもしれぬ、読む者の不安を誘う効果をもつことになったのである。さらに、怪物にも言葉を与え、外枠に位置するフランケンシュタインらの語りをメタレトリカルに反復させることで、『フランケンシュタイン』のもつ不穏なメッセージは裏打ちされるのだが、これについては稿を改めて検証したい。

注

- 1 See Cantor 103-32 and Homans 100-19.
- 2 テキストは、1831年の第三版にもとづく、M. K. Joseph ed., *Frankenstein: or The Modern Prometheus* (World's Classics paperback; Oxford UP, 1980)と1818年版に基づく *Frankenstein; or, the Modern Prometheus* (University of California Press, 1984) を使用した。作品からの引用は、特に断りのない限り Oxford University Press の方からとし、本文中の括弧内に頁数のみを示す。1818年版のテキストから引用する場合は、頁数のあとに [1818] と記す。
- 3 Stone 149-72.
- 4 アウグスティヌスは『告白』の中で次のように述べている。「このように、主よ、

幼年時代は、自分が生きていたことを記憶しておらず、それについてはただ他人のこたばを信ずるばかり、他の幼児から自分もそういう生を送ったであろうと推量するばかりですから、たとえその推量がいかに信頼度のたかいものであるにせよ、この世に生きている自分の生涯に数えるにはためらいを感じます。まったく忘却の闇につつまれているという点で、この時代は、母の胎内で過ごした時期とすこしもちがわないのですから。・・・それにしても、この時代〔幼年時代〕のことは省きます。じっさい、痕跡さえも想い出さない時代が、いまの私にとって、何のかかわりがあります。」 アウグスティヌス71.

森田伸子氏はこのアウグスティヌスの発言とブルーストの発想を比較して興味深い論を展開している。森田伸子、『テキストの子ども』, 145-58.

5 Bloom, *Mary Shelley*, 5.

6 Mellor, *Mary Shelley: Her life, Her Fiction, Her Monsters*, 215.

7 この作品のなかでは、アンドロイドに自分は人間だと思い込ませるために、製作者が様々な記憶を埋めこみ、子供時代の写真や当時の自分を知る人の話を用意するのだが、それこそがアンドロイドが「自分は何物か」という不安を感じたときにすがる唯一のよすがなのである。この作品を映画化した「ブレッドランナー」ではもっと如実に、アンドロイドが自分の子供時代の記念である写真を後生大事にする様が描かれる。

8 Barbara Johnson はこの小説の三人の男性の自伝がメアリーの自伝として読めると論じている (55-66)。

9 See Brown 5-7. この他、19世紀文学における子どものイメージについての研究として古典的というべきものがカヴニーの著書であり、他に Grylls, Pattison らのものがある。ヴィクトリア朝家族の大きさや人口動態などの統計上の資料と文学作品等にあられた人々の反応を関連づけようとした研究は Kane のもの。

10 Brown 5-7, Spilka 161-7.

11 See Brown(7), Spilka (161-7), 西條隆雄 (35-59).

12 19世紀の自伝を研究した Burnett やヴィンセントによれば、労働者階級の書き手を含む、ほとんどの自伝作家が自分の子供時代の思い出から自伝を語り出すのが適当だと感じていたし、子供時代の体験が後の自分の人格形成に関わりをもつという意識をもっていた (Burnett 3, デイヴィッド・ヴィンセント 145)。労働者階級出身者の自叙伝を研究したヴィンセントは、「自叙伝作家が子供時代を取り扱う手法は、成人後の人格形成に子供時代が大きく影響しているという、ワーズワース的見解を彼らが全面的に受容していたことによって影響されていた」と述べている。See ヴィンセント 75, 146-7.

13 Coe 40.

- 14 メアリーは『フランケンシュタイン』を書く以前にも、執筆中にも、繰り返しルソーと彼女の両親の著作を読んでおり、それらを通してルソーの思想に触れることになった。加えて、『フランケンシュタイン』執筆のきっかけを作ることになったパイロン卿と合流してのスイス滞在中も、ルソーの書き物は居合わせた人々の間での共通の読み物であり、話題であった。パーシー・シェリーはメアリーが小説の構想を得るまさに数日前にルソーを「ミルトン以来、世界でもっとも偉大な人物」と評したという。See Marshall 182, 228-33. 『フランケンシュタイン』に見られるルソーの影響については、Marshall 183-95, Cantor 103-32.
- 15 See Mellor, *Mary Shelley: Her life, Her Fiction, Her Monsters*, especially 213-8.
- 16 ド・レシー一家とフランケンシュタインの家庭の双方が一般の近代核家族と異なっている点は、どちらの家庭でも父親が公的世界との接触をもたず、家庭において母親と同じような役割を担っているということである。Kate Ellis はそれがフランケンシュタインが成長の途を誤った原因だとしている (Ellis 142).
- 17 1818年版では、両親と家庭教育に関して、

No creature could have more tender parents than mine. My improvement and health were their constant care, especially as I remained for several years their only child. (30[1818])

と簡単に済ませ、しばらく後に、

No youth could have passed more happily than mine. My parents were indulgent, and my companions amiable. Our studies were never forced; and by some means we always had an end placed in view, which excited us to ardour in the prosecution of them. (32[1818])

とあるが、1831年版では、子供の教育について長々と演説がはいる。

My mother's tender caresses, and my father's smile of benevolent pleasure while regarding me, are my first recollections. I was their plaything and their idol, and something better--their child, the innocent and helpless creature bestowed on them by Heaven, whom to bring up to good, and whose future lot it was in their hands to direct to happiness or misery, according as they fulfilled their duties towards me. . . . (33-4)

こうした発言は、アルプスでの対面において怪物が述べる冒頭に引用した一節や、フランケンシュタインの、怪物は“the promise of virtues”(147/152[1818])をもっていたのに、彼に接した人々の嫌悪感に満ちた仕打ちによってそれがつぶされたという感慨や、「作り手として、自分に与えられる幸福を彼に与える義務がある」(146/151[1818])という考えと呼応する。しかし、1831年版の方が、より露骨に家庭における親の義務と親子の情愛の大切さを謳い、怪物とフランケンシュタイン

の対話にあらわれるテーマの伏線とすることを狙っている。当時の社会により受け入れられやすく、わかりやすい作品にしたいという作者の意図のあらわれであろう。同時に、1831年には、こうした観念が受け入れられる傾向がより強まっていたことも示唆する改訂である。

18 See, for example, Margaret Homans 100-19, and Mellor, *Mary Shelley: Her life, Her Fiction, Her Monsters*.

19 Mellor, *Mary Shelley: Her life, Her Fiction, Her Monsters*, 213-8.

20 Mellor, *Romanticism and Gender*, 65-6.

21 Mellor, *Mary Shelley: Her life, Her Fiction, Her Monsters*, 123-4.

22 Mary Poovey はフランケンシュタインの自然との関係は彼の “wishful imagination” の産物にすぎないと指摘している。Poovey 127.

23 Mellor, *Mary Shelley: Her life, Her Fiction, Her Monsters*, 108.

24 See Richardson 13-25, and Gelpi 37-42.

25 Alan Richardson は、『フランケンシュタイン』を書いたメアリーを評して、“At least one notable woman writer of the period recognized, and parodied, the Romantic poet’s urge to assimilate feminine qualities” と言っている (21-2)。ところで、メアリーは、1831年の改訂時において、ウォルトンとフランケンシュタインの性格の中の、こうした女性的な要素による影響を強調している。つまりメアリーは、その変更によってフランケンシュタイン（そしてモデルであるパーシー・シェリー）の性格付けを和らげ、より理想的な人物に仕立てようとし、同時に、そうした「女性的」な徳を謳いあげることによって作品をより「道徳的」にしようとしたのだとも考えられる。しかしここではメアリーの「意図」がどうであったにせよ、結果としてフランケンシュタインらの性格付けがよりアンビヴァレントな色合いと皮肉さを帯びて読者の前に提示されているのは事実である。

26 この点で、Ellen Moers が自分の『フランケンシュタイン』論のエピグラフとして、スボック博士の育児書の中の母親への呼びかけ (“A baby at birth is usually disappointing-looking to a parent who hasn’t seen one before. . .”) を置いたことは非常に的確であったし、また今日的な意義をもつ選択であった。スボック博士が世の母親にこのように呼びかけたということは、その当時にも（この育児書の出版は1946年）、親は子供が誕生したときに赤ん坊を美しいと思い、感激と喜びを感じるはずだというコードが母親に植え付けられていたこと、そしてそれにもかかわらずそう感じられなくて、罪悪感を感じる母親も数多くいたであろうことを示唆している。Moers 90.

27 北本 125-9, 西條 41.

28 北本 74.

29 Gelpi 35-72.

30 Mitchie は、やはり Moers のエビグラフを引き、これは出産にまつわる “the material aspects” を社会が否定し、抑圧しているということに目を向けさせるものだとして説明しており、“we should view the making of the monster not as an isolated, aberrant, or transgressive event but rather, like birth, as something common, aspects of which seem monstrous because we repress or deny them.” と述べている (38-40)。Barbara Johnson はここに、母親が子供に対して嫌悪感や疎外感を感じることがあり得るという、「精神分析上の発見の中でもっとも抑圧されてきたもののひとつ」の現れを見ている (61)。

31 このあたりの分析は、Veeder 及び神尾を参照。

32 森田伸子氏は、ルソーの『告白』を「近代人の自伝の一つの典型」と呼び、近代の自伝においては、「アウグスティヌスの自伝にみられるような確固たる神という記憶のパラダイム」に代わって、自分だけの「自我という記憶のパラダイム」を作り上げるのだと述べている。森田、『テキストの子ども』, 157.

アウグスティヌスの自伝にあったような神と人間との関係といった枠組みが失われたとき、われわれは、自分の物語を語るために、どうしても物語の「種子」であり出発点となる「子供の私」から始める必要に迫られたのかもしれない。

33 Barbara Gelpi はこのロマン派の時代の女性性の “colonization” について論じ、その要因の一つとして、家族の結びつきや子供に対する接し方が変わって男性のメンタリティも穏やかになったという Stone の記述 (Stone 180) を引くと共に、次のような疑問を呈している。

... how is it possible to think that a society embarked on England's industrial, mercantile, and colonial course in the nineteenth century was made up of more trusting and less aggressive individuals than those of earlier generations? (Gelpi 37)

先に私はブルジョア核家族のイデオロギーの浸透と、子供観とそれに基礎をおいた自伝の発展とを結びつけた。同時に、内にむけては情緒的で、子供をかわいがり、外に向けては野心的で帝国拡張主義的でありえた、そんな時代と、無垢な子供時代から出発し、他者を “colonize” しながら自らの可能性の追求と自己の実現をめざすという、ここで論じてきた特徴をもった自伝の衝動が強まったこととは、どこかでつながり、重なっていたのではないとも考えられる。しかしここでは、この問題をこれ以上追求する用意はないので、疑問として提出するだけにとどめておきたい。

34 Jean-Jacques Rousseau, 17.

35 Robert Jameson によれば、映画では当初、怪物が少女との遊びを続けたくて水

中に彼女を放り投げ、死なせてしまう場面がはいっていたが、あまりにもショッキングだという批評家の意見によりカットされたという (32)。

36 森田, 『テキストの子ども』, 212-3.

37 北本 74.

主要参考文献

Primary Sources

- Shelley, Mary. *Frankenstein: or The Modern Prometheus*. World's Classic Paperback. Ed. M. K. Joseph. Oxford & New York: Oxford University Press, 1980.
- . *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*. Berkeley: University of California Press, 1984.

Secondary Sources

- Baldick, Chris. In *Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity and Nineteenth-Century Writing*. New York & Oxford: Oxford University Press, 1987.
- Bloom, Harold, ed. *Mary Shelley's Frankenstein: Modern Critical Views*. New York: Chelsea House, 1985.
- , ed. *Mary Shelley: Modern Critical Views*. New York: Chelsea House, 1985.
- Bowerbank, Sylvia. "The Social Order vs. The Wretch: Mary Shelley's Contradictory-Mindedness in *Frankenstein*." *ELH* 46 (Fall 1979): 318-431.
- Brown, Penny. *The Captured World: The Child and Childhood in Nineteenth-Century Women's Writing in England*. New York: Harvester Wheatsheaf, 1993.
- Burnett, John, ed. *Destiny Obscure: Autobiographies of Childhood, Education and Family from the 1820s to the 1920s*. Allen Lane, 1982 / London & New York: Routledge, 1994.
- Cantor, Paul. *Creature and Creator: Mythmaking and English Romanticism*. New York: Cambridge University Press, 1984.
- Coe, Richard N. *When the Grass Was Taller: Autobiography and the Experience of Childhood*. New Haven & London: Yale University Press, 1984.
- Dunn, Richard J. "Narrative Distance in *Frankenstein*." *Studies in the Novel* 6 (Winter 1974): 408-417.
- Ellis, Kate, "Monsters in the Garden: Mary Shelley and the Bourgeois Family." Levine and Knoepfelmacher 123-142.

- Fisch, Audrey A., Anne K. Mellor, and Esther H. Schor, eds. *The Other Mary Shelley: Beyond Frankenstein*. New York & Oxford: Oxford University Press, 1993.
- Forry, Steven Earl. *Hideous Progenies: Dramatizations of Frankenstein from Mary Shelley to the Present*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1990.
- Gelpi, Barbara C. *Shelley's Goddess: Maternity, Language, Subjectivity*. New York & Oxford: Oxford University Press, 1992.
- Grylls, David. *Guardians and Angels: Parents and children in Nineteenth-Century Literature*. London: Faber, 1978.
- Homans, Margaret. *Bearing the Word: Language and Female Experience in Nineteenth-Century Women's Writing*. Chicago & London: University of Chicago Press, 1986.
- Jacobus, Mary. "Is There a Woman in This Text?" *New Literary History* 14 (Autumn 1982): 117-141.
- Jameson, Robert. *The Essential Frankenstein: The Monster, the Myths and the Movies*. Leicester: Magna Books / London: Bison Books, 1992.
- Johnson, Barbara. "My Monster/My Self." *Diacritics* 12, No.2 (Summer 1982): 2-10. rpt. in Bloom, *Frankenstein: Modern Critical Views* 55-66.
- Kane, Penny. *Victorian Families in Fact and Fiction*. London: MacMillan, 1995.
- Ketteler, David. *Frankenstein's Creation: The Book, The Monster, and Human Reality*. ELS Monograph Series 16 (1979).
- Levine, G. and U. C. Knoepfelmacher. *The Endurance of Frankenstein*. Berkeley: University of California Press, 1979.
- Marshall, David. *The Surprising Effects of Sympathy: Marivaux, Diderot, Rousseau, and Mary Shelley*. Chicago and London: University of Chicago Press, 1988.
- Mellor, Anne K. *Mary Shelley: Her Life, Her fiction, Her Monsters*. New York & London: Methuen, 1988.
- . *Romanticism and Gender*. New York & London: Routledge, 1993.
- Michie, Elsie B. *Outside the Pale: Cultural Exclusion, Gender Difference, and the Victorian Woman Writer*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1993.
- Moers, Ellen. *Literary Women: The Great Writers*. New York: Doubleday, 1976.
- Orwell, George. *Nineteen Eighty-Four*. Harmondsworth: Penguin Books, 1976.
- Pattison, Robert. *The Child Figure in English Literature*. Athens, USA: University of Georgia Press, 1978.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. Chicago & London:

- University of Chicago Press, 1984.
- Richardson, Alan. "Romanticism and the Colonization of the Feminine." *Romanticism and Feminism*. Ed. Anne K. Mellor. Bloomington: Indiana University Press, 1988. 13-26.
- Rousseau, Jean-Jacques. *The Confessions of Jean-Jacques Rousseau*. trans. J. M. Cohen. Harmondsworth: Penguin Books, 1953.
- Rubenstein, Marc A. "My Accursed Origin: The Search for the Mother in *Frankenstein*". *Studies in Romanticism* 15 (Spring 1976): 165-194.
- Smith, Johanna, M. ed. *Frankenstein*. By Mary Shelley. Case Studies in Contemporary Criticism. Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1992.
- Spilka, Mark. "On the Enrichment of Poor Monkeys by Myth and Dream: or, How Dickens Rousseauisticized and Pre-Freudianized Victorian Views of Childhood." *Sexuality and Victorian Literature*. Ed. D. R. Cox. Tennessee Studies in Literature, No. 27. Knoxville: University of Tennessee Press, 1984. 161-79.
- Stone, Lawrence *The Family, Sex, and Marriage in England 1500-1800*. Abridged ed. New York: Harper, 1979.
- Veeder, William. *Mary Shelley & Frankenstein: The Fate of Androgyny*. Chicago: University of Chicago Press, 1986.
- Walvin, James. *A Child's World: A Social History of Children's Fiction*. Harmondsworth: Penguin, 1982.

- アウグスティヌス『告白』 山田晶訳 中央公論社, 1978.
- アリエス, フィリップ 『〈子供〉の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』 杉山光信・杉山恵美子訳 みすず書房, 1980.
- カヴニー, ピーター 『子どものイメージ』 江河徹監訳 紀伊国屋書店, 1979.
- ディック, フィリップ K. 『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』 浅倉久志訳 ハヤカワ文庫, 1992.
- ドゥーデン, バーバラ 『胎児へのまなざし——生命イデオロギーを読み解く』 田村雲供訳 バンセ叢書1 阿咩社, 1993.
- 林 完枝「怪物の誕生 メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』」『人文研究』大阪市立大学文学部 42 (1990). 735-52.
- 神尾美津雄 「パンドラの箱に封印を——シェリー夫人の犯罪——」 川崎寿彦編『イギリス・ロマン主義に向けて——思想・文学・言語』名古屋大学出版会, 1988. 89-114.
- 北本正章 『子ども観の社会史——近代イギリスの共同体・家族・子ども』 新曜社, 1993.

松村昌家編 『子どものイメージ——一九世紀英米文学に見る子どもたち』 英宝社,
1992.

森田伸子 『テキストの子ども——ディスクール・レシ・イメージ』 世織書房,
1993.

——. 『子どもの時代——『エミール』のパラドックス』 新曜社, 1986.

西條隆雄 「ディケンズと子ども」 松村昌家 35-59.

ヴィンセント, デイヴィド 『パンと知識と解放と——19世紀イギリス労働者階級の
自叙伝を読む』 川北稔・松浦京子訳 岩波書店, 1991.

Synopsis

Parodying the “Romantic” Autobiography: Why is *Frankenstein* Disturbing?

Tae Yamamoto

In her first novel *Frankenstein: or The Modern Prometheus*, Mary Shelley set her story of the Promethean quest of a young scientist and its agonizing outcome against the background of the modern bourgeois nuclear family. She also drew the reader's attention, through showing the three male narrators to be obsessed with the memory (or the lack of memory) of their childhood, to the importance of one's childhood in the formation of personality. These traits have allowed the novel to be read as a family novel which centers on a theme of the importance of affectionate parent-child relationships and nurturant parentage.

When we read the novel *Frankenstein* closely, however, we find that its belief in childhood and “natural” parent-child bond, which is regarded as a self-evident truth in later variations of the Frankenstein myth, conveys with it a sense of uneasiness here. This uneasiness, it can be said, has much to do with the effects of the concentric narrative structure, which consists of three autobiographies of the three males. Each of the three narrators is possessed with a strong desire to tell his own personal history, and tries to recite the story of his life beginning with his infant days. The more loudly they extoll the value of domestic happiness and the importance of nurturing that promise of virtues which every child possesses, however, the clearer it becomes that these morals and ideas are but a sort of norms encoded in the minds of them

and the society to which they belong. In other words, by means of presenting the autobiographical narrations of Walton and Frankenstein in her novel, Mary Shelley parodies the autobiography which might have been written in her day. The subversiveness of Frankenstein lies, it may be argued, not in the ostensive moral the story carries, but in its questioning of the mentality which produces and governs the modern, Romantic or Post-Romantic--if one may use such terms--autobiography. The aim of the present paper is mainly to examine the autobiographical narrative of Frankenstein, to study what aspects of the modern autobiography are revealed by Mary Shelley's parodying.

The codes which dominate Frankenstein's and Walton's ideas about the formation of one's personality can be summed up thus: first, human beings are born benevolent, with the promise of virtues, and parents must nurture children so that their virtues might grow; second, the dispositions which are formed in infancy will remain and continue to influence one's personality when one becomes an adult; third, men can, and should, steer themselves toward perfection, through affectionate relationships within the family, the influences of good friends and gentle women in the home, and the pleasures afforded by inanimate nature.

It has been customary for feminist critics to abstract "feminine" values, such as domestic affection, deference toward what is troped as Mother Nature, and harmony within the human relationships, from the text and to ascribe them to Mary, while denouncing Frankenstein as representing the opposite values. It is rather cursory, however, to slot all the attitudes and views into the two categories of "masculine" and "feminine". As we have seen, Frankenstein is intrinsically "benevolent" and he is eager to improve and perfect himself through receiving influences from his friends and women around him, and incorporate into himself qualities which might be

complementary to his own character. Maybe we may use the word “appropriate” instead of “incorporate” here, since it is a replication of the phenomenon which Alan Richardson discusses in his article as “the Colonization of the Feminine” by the Romantics. And it is in the very fact that we may use the word “appropriate”, that one can see Mary Shelley’s criticism of Frankenstein and, in turn, her ambivalent feelings toward the Romantics; for nothing is more impeccable, and therefore irritating, than the mental attitude which never ceases attempts to improve itself by appropriating the qualities and aspects of the opposing others. The biggest sin of Frankenstein, therefore, does not consist in the fact that he does not recognize his errors while he talks about “feminine” values. Rather, it consists in the very nature of his autobiographical discourse, by which he makes all the errors and faults a part of his narrative and, rationalizing and admitting all the consequences, make them into one seamless autobiographical story, consistent with his ‘impeccable’ codes.

Mary’s criticism of this nature of Frankenstein’s autobiographical narrative can be felt in the gaps between what he does and what he gives as explanation or, so to speak, “between the lines” of the text. It can be discerned, for example, when his perfect codes fail in tackling his own sexuality and childbirth. The fact that Frankenstein just runs away from his monster without explaining why except to say that it was “hideous,” shows that his codes simply cannot encompass the monstrous materiality of the experience. Mostly, however, the author who records this narrative seems to be irritated by its impeccability and solipsistic nature. Starting from his “pure” childhood, the autobiographer “colonizes” everything to improve himself, and his own errors and downfalls are incorporated into his story, which the autobiographer urges the reader to understand and judge by the “integrity” of

his motives and his intrinsically “pure” nature. This tough mechanism of autobiography, which is disclosed by a woman who is on the side of the “colonized” herself, has continued to the present day in the Western world, and is shared by all of us. This is why reading *Frankenstein* still disturbs.